



プラスチック・ アイランド化 する海を守れ!

海のためにソーダストリームができること

ペットボトルやポリ袋などのプラスチックごみによる海や環境、生態系へのダメージが深刻化している。その汚染の原因をつくるのは人間であり、それを保全、再生させるのも我々だ。日々の暮らしの中でできることは何か、炭酸水メーカー、ソーダストリームの取り組みから考えよう。

深刻な海洋汚染の現状

海を危機にさらす元凶として、気候変動や大気汚染による地球温暖化が叫ばれて久しい。しかし、海を汚すものはそれだけではない。写真は、海に漂流、漂着するごみの惨状だ。そして、この中の大部分を占めるのが、ペットボトルやポリ袋などのプラスチックであり、世界中から海に流れ出る総量は、毎年800万〜1300万トンといわれている。これらのプラスチックごみは海の景観を台無しにするだけでなく、深刻な海洋汚染を招いている。

そもそも1本のペットボトルが、地中に埋められようと海洋に投棄されようと、自然界で分解されるには450年以上かかるといわれている。いずれにしても自然界に放置された



加速する 環境汚染を止め、 いのちと 資源を守りたい

全世界で毎日15億本ものペットボトルが生産され、年間800万～1300万トンもの量が海に流れ出ており、こうしたプラスチックごみが海を汚染する「プラスチック・アイランド化」の事態が世界中で起きている。美しい海を取り戻すためには、気の遠くなるような時間が必要だ



ペットボトルは、分解過程でマイクロプラスチックという微小なプラスチック粒子となり、環境中に存在し続ける。とくに生態系を含めた海洋環境への影響が懸念されるとして環境省は、近年、日本近海に加え、南極に至る広範な海域において、分布調査や、マイクロプラスチックに吸着しているPCB等の有害化学物質の量を把握するための調査を実施している。

2015年度の実態調査によると、日本周辺海域(東アジア)では、北太平洋の16倍、世界の海全体の27倍のマイクロプラスチックが存在したことが報告されている。

プラスチック片を飲み込んだ海鳥やウミガメ、クジラなどが、命を奪われる例は、これまでも数多く報告されている。さらに、微小な粒子となったマイクロプラスチックは海全体で大小の魚の体内に取り込まれ、引いてはそれを食用とする人間の健康も脅かすことになる。

また、たとえ不法投棄は避けられなくても、ペットボトルの製造、リサイクルのためには大量の石油が消費される。回収のための経費も膨大なものになり、地球温暖化に大きな影響をもたらしているのだ。

ペットボトル削減をめざして

ペットボトルは一見、安全性にすぐれた容器だ。軽くて、ほとんどの飲み物に対応し、長期保存も可能にする。携帯にも便利。自販機のペットボトルで飲料を買うのは、ごくありふれた光景だ。



グローバル企業が掲げる 地球環境保全のための さまざまなアクション

「私たちはその利便性がかりにとらわれてきたのではないのでしょうか。でも、そうやって日々、今この瞬間にも製造、廃棄され続けるペットボトルが、環境破壊の原因になっていることを知った以上は、できるだけ減らしていく努力をすべきではないでしょうか」

と云うのは、家庭用炭酸水メーカーの世界最大企業ソーダストリーム社マーケティング部・部長の平野幸恵さん。グローバル企業である同社は、文字通り世界的規模で環境問題に取り組んできたが、日本でも独自に、「ペットボトルをより少なくすれば、地球環境のために、より多くの幸せ・喜び・未来が生み出せる」というコンセプトのキャンペーンを展開。「地球の今、そして未来」をテーマに、17年には福岡、大阪、名古屋、東京などの大都市を中心に全国8都市でイベントを開催した。

その核となっているのは、同社の主力商品であるソーダストリームだが、歴史は古く、1903年にロンドンで誕生した。ジンの蒸溜所を手がける企業家ジョン・ギルビーが、手で押すだけで簡単に炭酸水ができるシステムを開発。それが今日までつながっているもので、ソーダストリーム自体が、きわめてエコロジカルな商品なのだ。現在はイスラエルに本社を置き、45カ国で愛用され、全世界で毎年約9億リットルの炭酸水が家庭でつくられている。

ソーダストリームは、一般の水道水を用いて数秒で新鮮な炭酸水

をつくることができる手軽さに加え、500ミリリットルなら約18円という低コスト。量は好みで調節でき、炭酸ガスの継ぎ足しも可能なので、飲み残しという無駄もない。

市販の飲料には糖分や人工の添加物も多く、気づかないうちに過剰なカロリーを摂取する心配もあるが、ソーダストリームでつくる炭酸水のカロリーはゼロ。世界的な健康志向にも合致する。ヨーロッパのレストランでは水を注文すると、「ガス入りか。ノンガスか」と聞かれることが少なくない。それだけガス入り、つまり炭酸水が愛飲されているわけだ。

最近はこの炭酸水を調理に使う家庭も多い。肉や根菜は柔らかく、天ぷらの衣などはカリッと仕上がるなど、料理の味を引き立ててくれる。日本は水の豊かさを世界に誇る国だ。全国ほぼどこでも水道の蛇口をひねると出てくる水を、そのまま安心して飲み、調理に使うことができる。にもかかわらず、現在はペットボトルの水を購入する家庭が多い。しかもその水の価格はガソリンよりも高いことに気がついているだろうか。ソーダストリームは、環境省との環境問題に関する意見交換などもはじめたそうだ。良質な日本の水とソーダストリームの出会いを、もっと活用したいものだ。

環境と資源、健康を守る ソーダとヒルトンの取り組み

「ヒルトン東京ベイ」は、東京湾の美しさが身近に感じられる、東京

右／これまでの活動と新たな取り組みを語るソーダストリーム社マーケティング部・部長の平野幸恵さん
左／ドイツの国際的デザイン賞「reddot award 2017」でプロダクト・デザイン賞を受賞したソーダストリーム「スピリット」。販売価格：14,000円(税別)





ヒルトングループの新たな取り組み「Meet with Purpose」では、国際的な会議やイベントにおいて、環境や地域活性などに配慮したアクションが行われている。ソーダストリーム炭酸水を導入しマイボトルに切り替えることで、ペットボトル削減に貢献する



2017年4月に開催された「sodastream cage WORLD tour 2017 in TOKYO」の様子。右写真は、ペットボトル削減を訴えるソーダストリーム社のダニエル・バーンバウムCEO。そのほか、テレビでおなじみの武田邦彦氏らゲストを招き、環境問題のディスカッションを行った。入り口には廃棄された大量のペットボトル・ケージが展示された

「ここで登場するのが、ソーダストリームだ。浄水をデキャンターで用意しておけば、ゲストはそれぞれソーダストリームで炭酸水をつくって飲む。」「とくに外国からのお客様には好評です」とのこと。

「会議でお出しする飲み物も、ペットボトルではなく、参加者一人ひとりにマイボトルをご用意し、炭酸水などを自分でブレンドしていただいています」という。

「限りある資源であるエネルギー・水の消費、CO₂の排出量、廃棄物の削減。海の幸に恵まれ、農業、牧畜も盛んな千葉という立地を生かして地産地消の食材を積極的に提供地域貢献することなどです」と、副総支配人の川合肇さん。

「世界で570以上のホテルを展開するグローバル企業であるヒルトン・ホテルズ&リゾーツでは、これまで文字通り世界的視野で環境保全や顧客や従業員はもとより、かかわるすべての人々の健康を重視した理念を貫いてきた。ヒルトン東京ベイではさらにこの取り組みを徹底、深化させている。具体的には、

「ダイズニールゾート®のオフィシャルホテルだ。ホテルでは現在、企業責任として環境と健康に配慮した会議・イベントを実現する「Meet with Purpose(ミート・ウィズ・パーパス)」プログラムを実践している。」

「地球環境のため」というと、堅苦しくて面倒で、と思う方もいるかもしれませんが、でも、ソーダストリームを使うことでより楽しく、賢く、環境を守ることができるのだと知っていただきたいですね(平野さん)。

「たえば、会食などに用いられるテーブルには、原則としてテーブルクロスを使用しない。環境に配慮し、リネン類の使用を減らしている。」

「たえば、昨秋開催された野外ダイナーキャンプ「大人のDMND 2017」。このイベントでは、天然湧水をソーダストリームで炭酸水にして、ハイボールをつくり、クリーンカンティーンのコップで楽しむという試み。ブランドー、日本酒などづくるハイボールが人気だった。」

「世界のアウトドア用品を輸入するA&Fが扱うブランド、クリーンカンティーンもペットボトル削減を積極的に推進している。しかも、その活動を楽しみながら行うのが、このブランドの面目躍如といったところ。」

「都心はもとより羽田・成田の両国際空港からのアクセスがよい同ホテルは、最大1400人を収容できる宴会場を有し、国際的な会議や研究会、イベントがつねに開かれている。それらの参加者にペットボトルを用意するとなると、ごみの量も膨大になるばかりか、もちろん搬入搬出の時間と人手も相当なものになる。」

広がる各社との環境コラボ



左／企業責任として資源保護や環境保全につながる活動が大切と語る、ヒルトン東京ベイ・副総支配人の川合肇さん

右／環境問題についての意見交換を環境省の元環境大臣政務官・井林氏とともにを行った右手前／無印良品のキャンプ場で湧水を炭酸水で割ってハイボールなどを楽しむコラボイベントも開催

